

吉蔵の「無礙」の思想と『華嚴經』

木村 清 孝

中国隋代に活躍した吉蔵（五四九～六二三）は、かなり意欲的に『華嚴經』の思想に取り組んだと考えられる。このことは、かれが『華嚴遊意』一卷を著わしている点からも十分に窺われよう。しかしながら、吉蔵の場合には、三論教学の大成者としての役割が強調されるあまり、その業績に直接関係のない事柄については、ほとんど本格的に論究されてはこなかったように思われる。かれの『華嚴經』に対する関わり方の問題も、その一つである。だが、実際には、吉蔵は『華嚴經』を仏教の根本的立場を表わすものとして高く評価するとともに、『華嚴經』から大きな影響を受けながら自らの思想を構築している。ここに、吉蔵における華嚴經思想の受容という問題が究明されるべき理由が存するのである。本論文は、かれの思想の積極的方面における一つの頂点を示すと考えられる「無礙」の思想を取り上げてこれを解明しつつ、その思想の形成に及ぼした『華嚴經』の影響について検討しようとするものである。

さて吉蔵は、『中論疏』の中で、有無の二見を破して解脱を得るということをめぐって、次のような問答を行なつてゐる。

問。云何破耶。答。觀_ニ此眼根_一、本來空寂。故不_レ同_ニ六家之有_一。雖_ニ畢竟空_一、而眼見宛然。故異_ニ方広之無_一。故淨名經云。有_ニ仏世尊_一、得_ニ眞天眼_一、悉見_ニ諸法_一、不_レ以_ニ三三相義_一。華嚴經云。眼根入_ニ三昧_一、耳根起_ニ正受_一。觀_ニ眼無生無自性_一、說_ニ空寂滅無所有_一。如_レ此等文、並明_ニ眼根宛然、而無_レ所見_一、雖_レ無_レ所見、而無_レ所_レ不見。故空有無礙。空有既無礙、一根為_ニ六用_一、六根為_ニ一用_一。用能為_ニ無用_一、無用而能用。以_ニ三用無礙_一。是故、唯仏得_ニ稱為我_一。我者、謂自在義。

すなわち、吉蔵はここで、有無の二見をどのように破するかという問いに答えて、まず、眼という感覺器官がそれ自体本来的に空寂でありながら、しかも、さながらものにものを見る、という。次に、その教証として『淨名經』すなわち『維摩經』と『華嚴經』のことばを引き、これらは眼がさながらに見ながら見るところがなく、しかも見ないところがないというこ

とを明らかにするものであると論ずる。そして、そこから一般的な論理として「空有無礙」を導き、さらに、この「空有無礙」にもとづいて六根のはたらきの自在性を主張するのである。吉蔵の無礙の思想が、ここでは空と有の無礙から六根のはたらきの無礙へと延びていることが明らかであろう。

ところで、この無礙の思想の教証として『維摩經』の語とされる「仏世尊あつて眞の天眼を得、悉く諸法を見るに、二相の義を以てせず」とともに、『華嚴經』の「眼根より三昧に入り、耳根に正受より起つ。眼の無生無自性を觀じて、空寂滅にして無所有なりと説く」ということが引かれている。吉蔵は『法華義疏』においても、六根の無礙を証明するものとして、ほぼ同じ「眼より三昧に入り、耳より正受を出す。眼の無生無自性を觀じて、空寂滅にして無所有なりと説く」を引くのであるが、実はこれらの文は、『華嚴經』にそのままの形で示されているわけではない。それは、『六十華嚴』賢首菩薩品に、

於眼根中入正受、於色法中三昧起。示現色法不思議、一切天人莫能知。於色法中入正受、於眼起定念不乱。觀眼無生無自性、說空寂滅無所有。
於耳根中入正受、於聲法中三昧起。分別一切諸音声、諸天人莫能知。於聲法中入正受、於耳起定念不乱。觀耳無生無自性、說空寂滅無所有。

云々と説かれるものの改変・抄出なのである。すなわち經典では、三昧の実践者が眼とその対象である事物、耳とその対象である音声との間を自由に出入して、眼および耳の空なることを觀察・説示するといわれる。吉蔵はこれを改変し、直接、眼と耳との間における三昧の出入の自在を説き、眼の空なることをのべるものとして抄出・引用したのである。この改変は、おそらく六根の無礙を端的に証するために行なわれたのであろう。因みに、經典では眼・耳のほか六根すべてにおける三昧の様態が説示されているにもかかわらず、吉蔵がとくに「眼」を取り上げた背景には、眼が空の觀察にもつとも親しいものであること、それが六根の第一に挙げられること、そして『華嚴經』離世間品に「無礙眼」を含む十眼が説かれることなどが存しよう。かれがこの十眼に関心をもつていたことは、『法華義疏』においてポピュラーな五眼との相摂が論ぜられることによつて知られる。

吉蔵の「空有無礙」の思想は、もともと一つの方向を有している。そのことを示すのが、『二諦義』の、

言立義者、因緣無礙二諦。如中論所說。因緣所生法、我說即是空。即是假名、即是中道。橫豎皆無礙。仮即中、即豎無礙。二不礙不二、不二不礙二。二為三不用、不二為三用。因緣生法、我說即是空、即橫無礙。有不礙空、空不礙有、有為空用、空為有用。何但空有無礙。唯就有中、一切法無礙。如華嚴

所^レ弁。三世無礙、淨穢長短弘利無礙。如^レ此無礙、名曰^二聖諦^一。菩薩得^二無礙^一者、非^レ是諸法是有^レ礙、菩薩得^二無礙觀^一、令^二諸法無礙^一、得^二無礙通^一、使^二諸法無礙^一。良由^二諸法無礙^一故、菩薩體^二法無礙^一。故菩薩得^二無礙觀^一、得^二無礙觀^一故、得^二無礙弁^一、得^二無礙通^一。若諸法有^レ礙、菩薩得^二無礙通^一、使^二令無礙^一者、菩薩則有^二過罪^一。以^二諸法自無礙^一故、菩薩得^二無礙觀^一、得^二無礙通^一、得^二無礙弁^一也。如^レ此無礙故、名^二第一義^一也。

という一文である。これは、二諦の本質を「因縁の無礙」という視点から説明したものであるが、いま注目したいことは、ここがかが『中論』⁽¹⁰⁾のいわゆる三諦偈を「仮即中」の豎の無礙と「有(仮)即空」の横の無礙とによつて捉え、後者から「空有無礙」を導き、その上で「有」に焦点を合わせ、『華嚴經』を教証として「一切法無礙」「諸法無礙」を明快に論じていることである。『華嚴經』の思想を踏まえつつ、かれの思惟が「空有無礙」から「一切法無礙」「諸法無礙」へと展開していることが明らかであろう。先の「六根」とは、この「一切法」の主體的方面にほかなるまい。なお、この中に引用される『華嚴經』のことばは、おそらく離世間品の、過去一切劫、安置未來今。未來現在劫、廻置過去世⁽¹¹⁾。

や、盧舍那仏品の、

一切諸法如來刹、広大方便入^二仏界^一。見^二十方刹^一漸次至、国土不^レ増亦不^レ減。以^二一国土^一滿^二十方^一、十方入^レ一亦無^レ余。世界本相亦

吉藏の「無礙」の思想と『華嚴經』(木 村)

不^レ壞。無比功德故能爾⁽¹²⁾。

など、総じて『華嚴經』が「一法の中において衆多の法を解し、衆多の法の中に一法を解了す⁽¹³⁾」という考え方を貫くことにもとづいた要約であろうと思われる。ともあれ吉藏は、「有」の次元における一切法の無礙の思想を『華嚴經』に明確に見出しているのである。このことは、華嚴教學における『華嚴經』の事事無礙的把握に対応するものとして、忘れてはならないであろう。

ところで吉藏は、一切法の無礙のうち、とくに初期には三世の無礙、すなわち過去・現在・未來という時間の無礙に関心を払つたらしい。例えば『法華玄論』には、この問題が、次撞論三世無礙義。三不^レ一、一不^レ三。不^レ三不^レ一、得^レ為^二三^一。一故華嚴經云。現在為^二過去^一、過去為^二現在^一、過去名^二現在過去^一、現在名^二過去現在^一、未來名^二現在未來^一。故三世皆是因縁。以^二過去是現在過去^一、過去得^レ為^二現在^一。以^二現在是過去現在^一、現在得^レ為^二過去^一。未來亦爾。又三世得^レ為^二一世^一、一世得^レ為^二三世^一。此是一三、名為三三。一得^レ為^二三三^一。如^レ現在現在為^二未來^一、未來為^二現在^一。又云。過去劫攝^二現在劫^一、現在劫攝^二未來劫^一。長劫攝^二短劫^一、短劫攝^二長劫^一。有^二仏劫攝^一無^二仏劫^一、無^二仏劫攝^一有^二仏劫^一。乃至一劫攝^二一切劫^一、一切劫攝^二一劫^一。以^二有^一因縁無礙^一故、得^レ如^レ此也。若有^二定性^一、何猶能爾。即此經說。減為^二不減^一、不減為^二減^一、不生為^二生^一、生為^二不生^一。故多宝減而不減、並釈迦生而不生。此皆三世自在無礙之義也。

問。一世云何得^二三世^一、三世云何得^二一世^一。三世時節相礙、云

何得_レ爾耶。答。華嚴云。無量劫一念、一念無量劫。無來無積聚、而現_二諸劫事_一。以_二法無定性_一故。菩薩得_二諸法実相_一。所以能如_レ此也。

問。此猶未_レ明。請示_二其相_一。答。無量劫亦是正道、一念亦是正道。正道既不_レ異、無量劫一念豈異哉。復何失_二一念_一。無量劫亦非_二無量劫聚來_一。一念亦爾。無量劫一念、事恒不_レ失也。肇云。如_レ動而靜、似_二去來相_一。可_レ以_二神會_一、不_レ可_レ以_二事求_一也。

と、詳しく論ぜられている。すなわち、まず初めに、上述した「因縁の無礙」を根拠として、主に『華嚴經』に依りつつ、一切の時間の相即・相摂がのべられる。引用される『華嚴經』の文は、離世間品に説かれる菩薩の「十種の入劫」や「十種の説三世」、および初発心菩薩功德品に、菩薩が発心する理由の一つに關して、

欲_レ知_二長劫即是短劫、短劫即是長劫_一、知_二一劫即是不可數阿僧祇劫、不可數阿僧祇劫即是一劫_一、知_二一切有仏劫_一、知_二一切無仏劫_一、知_二一仏劫中有無量仏_一、知_二無量仏劫中有二一仏_一、知_二異劫中有無異劫_一、知_二無異劫中有異劫_一、知_二有尽劫は無尽劫_一、知_二無尽劫是有尽劫_一、知_二無量劫即是一念_一、知_二一念即是無量劫_一、知_二一切劫入無劫_一、知_二無劫入一切劫_一。

と示されることなどを要約したものと一応いえよう。だがそれは、もはや吉蔵自身の立場に溶け込んでしまつてゐる。総じて上の吉蔵の三世無礙の思想には、時間論として華嚴教学

の代表的な思想体系の一つである十玄門中の「十世隔法異成門」に比肩しうるだけの厚みが存するように筆者には思われる。

さてその思想は、次に二つの問答を通してより明確にされる。すなわち、まず第一の問答において、一世がそのまま三世であるということが、法そのものに固定性・実体性がないことを根拠として主張される。そしてこの中で、先に引用した『華嚴經』初発心菩薩功德品の「無量劫即是一念、一念即是無量劫」の教説が、論理の展開上、決定的な役割を果たしているのである。

第二の問答は、この「一念即是無量劫」の教説の正当性に關して、吉蔵独自の解釈を行なつたものである。すなわち吉蔵は、無量劫も「正道」であり、一念も「正道」であるから、無量劫と一念とは異ならない。また、だからといって、一念を失することはない。なぜなら、無量劫とは、無量の劫の集まりではないからである。一念についても、それと同じである。無量劫のままに一念であるということは、明白な事實である、とのべる。そして、現象にとらわれず、根本的な真実を体得すべきことを『肇論』を引いて強調するのである。このような吉蔵の、一念と無量劫との相即の思想は、先の『二諦義』自身においても示されている。すなわち、

華嚴何意云_二一念無量劫、無量劫一念耶_一。体_レ道故如_レ此。何者、

一念即是道、無量劫亦是道。故無量劫即一念。何以故。無礙道故。体^ニ無礙道故、得^ニ無礙用。一念無量劫、無量劫一念。無量劫一念、非^ニ一念。一念無量劫、非^ニ無量劫。非^ニ一念、非^ニ無量劫、而一念無量劫。此中、横豎無礙具足故。經云。一中解無量、無量中解^レ一也。⁽²⁰⁾

とあるのがそれである。文末に「經に云く」として引かれることばも『華嚴經』の如来光明覺品に出るものであるが、ここでは、無礙なる「道」にもとづいて無量劫と一念の相即が説かれるわけである。この「道」が上の「正道」と同一であることは間違いない。吉藏は、時間の無礙の根底に、はつきりと道そのものの、『三論玄義』の語を借りれば、「清淨にして更に二道なき」一中道を見ているのである。

思うに、吉藏の無礙の思想の基本は、一々の存在が空のままに有であるということ、すなわち「空有無礙」である。この上に、六根の無礙、いわば主体的活動の無礙と時間の無礙を含む一切法の無礙が明らかにされる。しかし、こうした無礙を根本的に支えているものは、おそらく八不中道、あるいは二諦中道と名づけることのできる「道」そのものである。

「道」そのものの無礙性である。吉藏においては、すべての無礙はそれにもとづいて成立すると考えられていたのである。そしてまた、このようなかれの無礙の思想の形成に対して、『華嚴經』はほぼその全体にわたって抜きさしならない影

響を与えている。われわれは、吉藏の根本思想と『華嚴經』との關係を改めて見直す必要を強く感ずるのである。

1 『法華遊意』(大正三四、六三四下)、『法華玄論』一(同、三六六中下)など参照。

2 『中論疏』四末(大正四二、六二二)。

3 正しくは「仏世尊あつて、眞の天眼を得、常に三昧に在つて悉く諸仏國を見るに、二相を以てせず」(『維摩經』上、大正一四、五四一中)である。吉藏が「諸仏國」を「諸法」と變えて引用している点にとくに注意されたい。

4 『法華義疏』一一(大正三四、六一五下)。

5 『六十華嚴』七(大正九、四三八下)。

6 吉藏は『法華玄論』七(大正三四、四一九下)では、上の『華嚴經』の文に手を加えて自らの文章の一部とし、「又菩薩は眼より三昧に入り、耳より正受を出で、眼の無生を觀じて空非有なりと説く」とのべる。

7 『六十華嚴』四一(大正九、六五七下)。

8 『法華義疏』四(大正三四、五〇七中)。

9 『二諦義』上(大正四五、八五中)。

10 『中論』四(大正三〇、三三三中)。正しくは「衆因緣生法、我說^レ即是無。亦為^ニ是假名^一、亦是中道義」である。

11 『六十華嚴』四三(大正九、六七四中)。

12 同、四(同、四一四中)。

13 同、二八(同、五八〇下)。

14 『法華玄論』九(大正三四、四四一上中)。

15 原文は次の通りである。「仏子。菩薩摩訶薩、有二十種入劫。何等為十。所謂入過去劫、入未來劫、入現在劫、入不可數劫、入不可數劫、入不可數不可數劫、入不可數可數劫、入一切劫、入非劫一切劫、入一切劫即是一念。仏子。是為菩薩摩訶薩十種入劫。因此十種入劫、則能普入一切諸劫」（『六十華嚴』三七、大正九、六三四上）。

16 すなわち、「仏子。菩薩摩訶薩、有二十種說三世。何等為十。所謂過去世說過去世、過去世說未來世、過去世說現在世、未來世說過去世、未來世說現在世、未來世說無尽、現在世說未來世、現在世說過去世、現在世說平等、現在世說三世即一念。仏子。是為菩薩摩訶薩十種說三世。因此十種說三世、則能普說一切三世」（『六十華嚴』三七、大正九、六三四上）中）とある教説である。

17 『六十華嚴』九（大正九、四五一上）。

18 『一乘十玄門』（大正四五、五一七上）、『五教章』四（大正四五、五〇六下）など。

19 『肇論』物不遷論（大正四五、一五一中）の原文は、「若動而静、似去而留。可_レ以_レ神会、難_レ以_レ事求」である。

20 『二諦義』中（大正四五、九五下、六上）。

21 『六十華嚴』五（大正九、四二三上）。

22 『三論玄義』（大正四五、一四中）。

執筆者紹介（四）

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|------------|-----------|----------|-----------------|----------|----------|----------------|--------------|-----------|------------------|----------|-------------|------------|-------------|--------------|
| 林 伝 芳 | 古 坂 絃 一 | 原 田 覚 | 平 井 宥 慶 | 小 峰 弥 彦 | 三 友 量 順 | 福 原 蓮 月 | 神 谷 信 明 | 工 藤 茂 樹 | 小 山 一 行 | 西 村 実 則 | 三 友 健 容 | 田 端 哲 哉 | 高 橋 邦 男 | 田 中 教 照 | 草 間 法 照 |
| (龍谷大学講師) | (大阪教育大学講師) | (東京大学大学院) | (大正大学副手) | (大正大学総合仏教特別研究員) | (東京大学助手) | (叡山学院講師) | (岐阜市立女子短期大学講師) | (四天王寺女子大学教授) | (東洋大学大学院) | (大正大学総合仏教研究所研究員) | (立正大学助手) | (三重大学非常勤講師) | (早稲田大学大学院) | (武蔵野女子大学講師) | (北海道大学大学院修了) |

(八三頁につづく)